

認したが、其後我国各地殊に紀州や九州の一部で富樫君の採集して来た豊富な材料を精密に検定した結果 Müller が挙げた様に子柄は繊弱で、少数の彎曲した枝を分ち、光線の当る面には棘枝を生し他の面は裸出し、綿毛はなく、棘枝は下部は多少分枝するが上部に至るに従て顆粒状となり *japonicum* に比ぶれば全体デリケートで明に独立種である。

タイプローカリチー、丹波（三好標本）

其他の産地、伊豆七島（御蔵島）leg. 長谷川 仁, 1966. 紀伊、西牟婁郡大塔村小川峠, leg. M. Togashi, 1970; 日向、西諸県郡、小林市、御池, leg. M. Togashi, 1970; 薩摩、下甕島、広瀬、観音滝上, leg. M. Togashi, 1970; 紀伊、西牟婁郡、大塔村、大塔山, leg. Z. Sasano, 1970; 紀伊、東牟婁郡、北山村、七色ダム, leg. Z. Sasano, 1970.

○アツバスマレについて（津山 尙） Takasi TUYAMA: On *Viola boninensis* Nakai

アツバスマレは1922年中井猛之進博士によって八丈島、父島、母島の標本に基いて発表された。葉が厚く光沢があり、果実が短円で、花時にも葉は基部が矢じり形をなす点でスマレとは異るとされた。その後水島正美博士は青ヶ島の植物を研究した際にこれをスマレの変種として *Viola mandschurica* W. Becker var. *boninensis* (Nakai) Mizushima とした。小生ははじめからスマレとは別種であるとは思っていなかったの、氏の見解は妥当であると思う。アツバスマレはスマレの海岸型なのであって、通根が黒味を帯びている性質は他の *Viola* にないことであるが、両者に共通である。

アツバスマレの分布は伊豆七島の青ヶ島を南限とし、本州の南岸に及ぶものである。種名が *boninensis* であるので、小笠原島に本来自生のものと見あやまれることが多いが、小笠原島には本来なかったものであると考える。戦前には、小笠原にも稀ならず発見されたが、その分布地は大体耕作地に関連のある所に限られ、八丈島あたりから人為的に移入されたものと考えられる。戦後の耕作地の荒廢と、二次植生化に伴って、これが採集されたことを聞かない。小生がこれを小笠原島の自生植物から除外したのはこの理由からである（続自然景觀調査報告；小笠原の自然）。

アツバスマレはこのように海岸型のものであるが、これを東京で鉢栽培し、種子から数年に亘って何回も繁殖した結果、光沢性のある厚い葉の性質は不変であった。海岸性の獲得には長い地史的の背景があるものと考えられる。

佐竹義輔博士と伊藤栄氏が、三浦半島南端の城ヶ島で一種のスマレ属を採集された。生品の状態は、葉は厚く、表面に光沢があるのはアツバスマレと同様であるが、葉の表裏、葉柄に白色の毛がやや密に生えているのに特異性があつた。スマレにも多かれ少なかれ有毛のものがあるから、有毛品の方が、海岸型化したものとも考えられるが、一般に、海岸型は無毛化を伴うものであるから、この所をどの様に考えてよいか。誰か追及して見て頂きたいものである。（お茶の水女子大学）